

湖西：50年以上前は一面の湿地帯 時間軸をすえて生態学を学ぶ

生態学とは「地球とそこに棲む生命の現在、過去、未来にわたる歴史」と定義されます。私達は環境が汚染されたら、それを浄化することに目がいてしまいます。では、時間軸をすえて、生態学から見るとどうなのか？今年度は琵琶湖・淀川流域をめぐる3つのエクスカージョンを設定しました。

5月19日(土)に安曇川駅に集合です。森下郁子先生を講師に、最初に近江高島駅近くの「高島ビレッジ」を訪問しました。高島の文化と伝統を大切にしつつ、かつての風情を残す通りに店がいくつも点在しています(写真1)。近くには、大きな石の水車がまわる「石輪の庭」など、当時を再現していました。高島はまちおこしに熱心でこのような店舗や建物が8つ点在していました。この通りは、古くから越前と近江を結ぶ「西近江路」で、ひなびた落ち着いた雰囲気です。当時は北陸からの物産を京まで運んだ賑わいのある道だったでしょう。湖西の山手側にはさば街道沿いに町が発展し、そして琵琶湖沿いは一面の湿地帯が続き、一方では、舟運による海津、今津、大津が栄えたということです。

このたび私達が訪れた湖西は、ここ50年間で作られたのです。50年余り前にはこのあたりは一面の湿地帯で電気もなく、大きな木もそんなになかったのだそうです。



高島ビレッジ



西近江路

内湖では真珠を養殖したり、フナを飼ったりしていましたが、肥料やえさで、だんだん汚染がひどくなり、浄化の問題が起きました。その後内湖の浄化に関する研究は盛んに行われましたが、琵琶湖自体の汚れが回復したのは、琵琶湖へ流入する内湖などからの流れを切ったことのほうが意味が大きかったということです。

次に、今津町弘川のザゼンソウの群生地に向かいました。今は住宅地のこの一帯が当時全部湿地帯だったことは想像もできません。尾瀬沼や信州の山の中で見えるものと思っていたザゼンソウがこんなに身近で見られるのです。包につつまれた小さな仏様のような花の姿の時期は過ぎていましたが、保護柵で囲まれた一帯にザゼンソウの葉が茂っています。富栄養化で葉っぱはとても大きい。今は背後に竹林が迫っていて干陸化しています。このように竹が入りだしたら湿地に復元んさいせいするにはもうむづかしいとのことでした。

今から50年以上前、講師の先生が学生時代の頃に調査に入りました。あたりは湿地だから水に強い植物があるのではと調べにきました。当時は、木は水の中には生えないと考えられていました。もし、ダムを造ったら、必ず木は枯れる。1ヶ月呼吸しなかったら木は



ザゼンソウ
群生地

枯れてしまうと考えられていました。その頃、このあたりは沼地で家もなく、交通手段もありません。船で近くの港へ上陸し、借りてきたアメリカ軍の上陸用の舟艇をリヤカーに積んで徒歩で向かったのだそうです。そんな時代でした。

今、群生地の周囲の土地がずいぶん高くなっているのは、水路を造って土地を高く上げたからです。元々のベースの高さはこのザゼンソウが生えているところです。

今は住宅地に囲まれて、保護域にかろうじて残っているザゼンソウ群生地。竹や広葉樹が侵入しており、生態系は人との関係で常に変化していることを学びました。

箱館山の北側に陥没湖の「淡海湖」があります。雨が降る度に水が溜まって、流入も流出もない湖で「処女湖」とも呼ばれています。木々に囲まれた「淡海湖」は清らかな静寂性を漂わせています。50年以上前に調査に入ったおりには、当然固有種がいると考えられていたそうです。ところが琵琶湖と同様のプランクトンや魚がいました。プランクトンや魚の卵のような小さな生物は陸から鳥が運んでくるのだとわかるまでには時間がかかりました。鳥の羽毛について移動します。固有種は種の進化の過程をたどれるので重要ですが、簡単にみつかるわけではありません。種はその地域が作り出すものです。それはそうと、当時指導の先生は馬に乗って、学生は徒歩で調査に入ったのだそうです。

湖北は豊かだったそうです。山持ちが多く、戦後でも、山は農地解放の対象外だったのでした。戦後の5年間は、復興のために土地改良区に杉を植えました。日本の山は氷河期の影響を受けていないので、木の種類が多く、木々の緑にも種々のグラディエーションがあって、この若葉の織りなす様は素晴らしいものがあります。登る道脇には桜の木が植えられていますが、もともと桜は山師の目印だった。山師が鉱物資源を探して、鉱脈を見つけるとそこに山桜を植える。山桜が実生から育つことはほんとうに少なくてだから、人が植えてやらないと育たない。



淡海湖

だから山師は桜の苗木とツルハシを持って山に入った。山桜があれば、そういう人があるいた跡とも考えられるのだそうです。

昔は木を燃料にしていたので里近くの山ははげ山の方が多かった。住む人の数は燃料にできる木の本数で決まるものだった。どの山も地面が見えるほど、山に木は本当に少なかった。

「淡海湖」は水を多く貯めるために堤の低いところにコンクリートで堰堤が作られ、農業用のダムとして大正15年築造された。ここも今はバスがいて釣り人が多く訪れているようだ。

マキノ高原では自然の多様性と融合した関係を、人間の文化として考える・体感することを目指しています。マキノ・ハイランドには長期滞在型のレクリエーション施設を供え、「親子DE森林セラピー」や、「マキノ高原」オリジナル 見る・聴く・嗅ぐ・触る・味わう・・・五感の森林浴、グランド・ゴルフ、温泉水中ウォーキング講習、キャンプ、メタセコイヤの素晴らしい並木道など多彩なプログラムや施設等を通じて自然と融合できます。生態とは人間との関係も大切な部分です。帰路温泉に入り、リフレッシュいたしました。

北小松駅近くにある、鮎の姿焼きのお店「松水」はアコはもちろん川魚はコイからチョウザメまで泳ぐ水槽が圧巻です。湖西での多彩なエクスカージョンを終え、マキノ駅で解散です。湖西線は新快速の最終が16時台なので要注意です。

(2012.5.19 本庄孝子)